

## ヴァルザー—ブービス論争について

守 屋 勉

1998 年後半におこなわれたヴァルザー—ブービス論争の発端は、作家マルティン・ヴァルザーの平和賞受賞にさいしての演説（10 月 11 日）であった。ヴァルザーはそこで、自分はアウシュヴィッツの惨禍を十分に認識しているとしながらも、強制収容所の残酷な映像は見るに耐えがたく、そうしたものからすでに 20 回以上「目をそむけた」と述べた。またこの十年間こうしたドイツの過去がマスコミでかつてなかったほど「常設展示」される原因はアウシュヴィッツの「現在の諸目的のための道具化」にあると指摘した。アウシュヴィッツはいまや「日常的な脅し」や「モラルの棍棒」に成り下がり、儀式化・形骸化し、その思考の延長線上にあるベルリンに計画中であったホロコースト警告碑に対しては「サッカー場大の悪夢」、「恥のモニュメント化」と言い捨てた。

この演説を聞いていたドイツユダヤ人中央評議会代表のイグナツ・ブービスは翌日にもこれを「思想的放火」と非難した。彼が「水晶の夜」追悼式典やインタビューなどで示した理由は、犠牲者に対する補償が不十分ななかで道具化を口にしたたり、過去に目をそむけたりするのは言語道断である、また日常的な脅し、モラルの棍棒という発想は不可能である、警告碑建立に反対してもよいが、ヴァルザーのような罵り方は許されない、さらに、このような主張はネオナチの口からよく耳にするが、ヴァルザーのような発言力のある人間がそれを語ると、その影響は甚大である、というものであった。

12 月 12 日両者は直接に話し合い、「現在の諸目的」とは補償問題を意図したものではなかったことをヴァルザーが述べるとブービスは「思想的放火」という発言を撤回し、論争は一応の終結をみたが、その他の点では良心の自由を説くヴァルザーと、過去についての認識とその責任の重要性を説くブービスの意見は対立したまま、99 年 8 月のブービスの死にいたった。

この論争では、長い年月を経ていまなおドイツ人とユダヤ系ドイツ人の間に過去をめぐる大きな溝が残っていることが、改めて明らかになった。ヴァルザーはタブーに敢えて挑み、個々人自らの良心と反省に基づかない、形骸化したアウシュヴィッツの記憶形態の陳腐さを指摘したが、ブービスにとってこの演説は過去を抹消し責任を回避する、ドイツ知識人特有の試み、つまるところ過去の克服をやめてしまおうという試みに他ならなかった。フランクフルトでのブービス追悼集会にはラウ大統領、シュレーダー首相をはじめとする各界の著名人が参列し、両民族の和解に貢献したブービスの功績を一樣に称えたが、ユダヤ人側の参列者の多くがヴァルザー論争に言及し、ブービスが孤立し、ほとんど一人で戦ったことを挙げ、「ほとんどの人たちはブービスを見捨てたではないか」と論争時のドイツ人の態度に対して厳しい言葉を浴びせた。